

## 桐野夏生作品の分析

堤内 純加

本研究では、女性作家、桐野夏生の全作品をメインの研究対象とし、分析を行った。桐野は1984年からの、雑誌への掲載をきっかけに作家としてデビューし「桐野夏生」の名前で約40年間、小説家として活躍してきた。現在は日本ペンクラブの第19代会長を務めており、作家として確固たる地位を確立している。これまでに約100作品を発表してきた桐野は、70歳になった現在でも執筆をつづけている。そこで本研究では、作品の世界観を分析し、どのような作品が桐野夏生らしいといえるのか、どのような題材、傾向の作品が世間からの評価が高いのかを明らかにすることを目的とした。研究手法は、桐野の全作品からメタデータを抽出することで、「桐野夏生らしい」作品と、世間からの評価が高い作品を導き出した。具体的には、題名、題名の単語数、出版年、出版社、レビュー、受賞、時代指定、キーワード、ミステリー、ページ数をメタデータして抽出し、これらをスプレッドシートにまとめ、グラフ化を行った。

その結果、「男女格差」「恋愛」「男女間の犯罪」などが作品の桐野夏生らしい題材であることが分かった。しかし、どの作品も単純なロマンス小説というわけではなく、殺人や、精神病など思い題材がストーリーの主軸となっている。それでもすらすらと読み進めてしまう点が桐野作品の大きな特徴である。これは誰にでも起こりうる「身の回りの誰か」の話であることが没入感を生み、ページをめくるスピードを高めていると思われる。さらに、ほとんどの作品がハッピーエンドで終わらず、地獄を体験する感覚が長く続く点も桐野の作品と特徴である。

世間からの評価が高い作品は、「題名が文章系」「450 ページ前後」「ミステリーではない」「桐野夏生らしい」「朝日新聞、または毎日新聞社から出版」「2015年以降刊行」の本になることが分かった。特に、『路上のX』（朝日新聞社,2021）、『砂に埋もれる犬』（朝日新聞,2021年）、『真珠とダイヤモンド』（毎日新聞社,2023年）の3作品は評価が高い。これらはいずれもアマゾンの書評レビューが4.0となっている。

さらに、読者層も絞ることができた。これまでの作品の変遷の中で、扱った題材が、ラブロマンス系や、社会問題提起、夫婦間の問題でレビューが高かったことから、社会経験がある程度豊富な30~40代の女性が読む傾向にあることが分かった。これは読者自身の経験に重ね、共感を得やすいことから、当該層の支持を得ているのではないかと推測される。

今回、桐野夏生作品の分析を行った結果、「桐野夏生らしさ」と、世間の強化が高い作品を分析することができた。さらに研究を進めることで更なる発見があるだろう。また、ほかの作家に本研究を適用することで、応用が利くこともあるかもしれない。これからの作家研究の分野の発展に期待する。

(指導教員 宇陀則彦)